

【審査論文】

『ひさご』 「木のもとに」 歌仙分析

佐藤 勝明

An analysis of *Hisago*

Katsuaki SATO

要旨

珍碩編『ひさご』(元禄三年刊)は「俳諧七部集(芭蕉七部集)」の四番目に位置し、奥羽・北陸行脚を終えた芭蕉の新境地を示す連句集として知られている。中でも巻頭の「木のもとに」歌仙は、『猿蓑』所収の諸歌仙とともに、連句史上の傑作として名高く、貞門・談林の古風を完全に打破した新風の一卷とされている。本稿では、この一卷を対象に、それぞれの付合を、①「見込」、②「趣向」、③「句作」の三段階による分析方法を使って読み解いていく。そして、その付合の多くが、前句がもつ気分・雰囲気に合わせて付付であることはたしかにもせよ、その「句」を句姿にも示したものが多く、これを指摘し、芭蕉晩年の付合とはその点が異なることを明らかにする。

キーワード： 俳諧・芭蕉・連句・ひさご

去来が「贈其角先生書」(『菊の香』等)で「故翁奥羽行脚より都へ越給ひける比、当門の誹諧已に一変す」と喝破したように、「細道」の旅を経て芭蕉の俳諧が大成に向かつていくことは、周知の事実にはかならない。去来・凡兆編の『猿蓑』(元禄四年七月刊)はその頂点に位置する撰集であり、珍碩の編になる連句集『ひさご』(元禄三年八月刊)も、これに並ぶ重要な一書として誤らない。中でも巻頭の「木のもとに」歌仙は、芭蕉自身が「花見

の句のかゝりを少し心得て、軽みをしたり」(『三冊子』)と述べたこともあって、旅後の新境地を示すものとして高く評価されている。芭蕉は元禄三年三月の伊賀滞在中、同じ「木のもとに」句を立句に二度の連句興行を試みたことが知られており、それら(『花はさくら』所収の一卷と『猿虫庵小集』所収の一卷)に満足できず、発句に見合う一卷を求め、近江で三度目の興行をなしたものが、『ひさご』所収の三吟歌仙ということになる。ここで翁(芭蕉)

の相手を務めるのは珍碩(洒堂)・曲水(曲翠)の二人。珍碩は『ひさご』を編集したほか、元禄五年九月から翌年一月にかけて深川芭蕉庵に滞在し、『深川』(元禄六年刊)を上梓することでも知られる。また、曲水は芭蕉が最も信頼を寄せた門人の一人で、元禄五年二月十八日付の曲水宛芭蕉書簡は「風雅三等之文」として著名。この二人を連衆に迎え、元禄三年三月の時点で、芭蕉がどのような作風を示そうとしたのが、大きな興味の中心になる。以下、本稿で『ひさご』『木のもと』に「歌仙を分析・考察の対象とする所以」であり、付合の分析にあたっては、①作者は前句をどう理解し、とくにどの点に着目したか〔見込〕、②その見込に基づき、この句ではどのような場面・情景・人物像などを描こうと考えたか〔趣向〕、③その趣向に従い、どのような素材・表現を選んで一句にまとめたか〔句作〕、という三段階の分析方法を用いる。先行する注釈書は多く、太田水穂著『芭蕉連句の根本解説』(岩波書店 昭和5年刊)、幸田露伴著『評釈ひさご』(岩波書店 昭和22年刊)、浪本澤一著『芭蕉七部集連句鑑賞〈増補〉』(春秋社 昭和45年刊)、日本古典文学全集『連歌俳諧集』(小学館 昭和49年刊)、伊藤正雄著『七部集芭蕉連句全解』(河出書房新社 昭和51年刊)、阿部正美著『芭蕉連句抄 第八篇』(明治書院 昭和58年刊)、安東次男著『風狂余韻』(筑摩書房 平成2年刊)、新日本古典文学大系『芭蕉七部集』(岩波書店 平成2年刊)、新編日本古典文学全集『松尾芭蕉集②』(小学館 平成9年刊)などを参照して、略称をもつて適宜に利用・引用した。底本には架蔵の版本(後刷)を用い、句の掲出にあたっては、原典に忠実であることを第一義としつつ、字体は通行のものに統一し、濁点と振り仮名を私に付した。

花見

木のもとに汁も鱧も桜かな

翁

発句 春三月(桜)

〔句意〕花盛りの木の下で、並べられた料理の汁にも膾にも桜が散り込み、すべてが桜になってしまっていることだ。

〔備考〕「木」はキとコと両様の読みがありうる中、「木のもと」が和歌に常用され、芭蕉は西行の「木のもとに旅寝をすれば芳野山花のふすまを着する春風」(『山家集』)を念頭に置いてもいるらしいことから、コと読む通説に従う。「汁」は料理の汁物。「鱧」は「膾」に同じく、魚介類や野菜を酢で和えた料理。「汁も鱧も」の語調については、長嘯子「閨ちかき軒端のさくら風ふけば床も枕も花の白雪」(『挙白集』)を踏まえるとの指摘が多く、首肯に値する。汁と膾とこれらを覆うように散る桜花だけを詠みながら、読者には、そこに展開しているであろう宴の様子や春の日の駘蕩とした気分まで、感得させることになる。芭蕉の自信は、その具象性と想像力の余地が大きい点に認められるべきであろう。芭蕉における「かるみ」の何たるかを考える上で、注目すべき一句と言える。

西日のどかによき天気なり 珍碩

脇 三春(のどか)

〔句意〕西日が穏やかにさして実によい天気である。

〔付合〕①前句を花見の宴もたけなわになったころの光景と見定め、②時分を夕刻に近いころとしつつ、日和もよいことであろうと考え、③西日のどこかで上天気であるとした。

〔備考〕「西日」は夕方に近づいて西に傾いた太陽であり、また、その日ざしをいう。近代の歳時記では夏の季語として扱うものの、近世期のものには採られていない。「のどか」に関しては、一月の扱いとすることが多いものの、『はなひ草』等では兼三春とされ、前後が三月の句であることから、この句

を一月とすることはできない。なお、「なり留りは四句目ぶりて、脇には異例」(『新大系』)とも、「用言留は発句の仕立て方が重いとときに多くみられる」(『全集』)とも指摘される。

旅人の虱かき行春暮て

曲水

第三 春三月(春暮て)

〔句意〕春も暮れていくころ、旅人が虱に喰われた箇所を掻きながら行く。
〔付合〕①前句から春暖の気候を感じ、前句がある人物の口をついて出た言語と見て、②西日の中を行く旅の者を想定しつつ、春の暖気から虱に連想を及ぼし、③暮春に旅人が虱の喰処を掻きながら行くとした。

〔備考〕「春暮て」は春が過ぎ去ろうとしていくことで、「暮の春」や「春暮る」は諸書に三月の扱ひ。『類船集』に「虱↓旧布子・順礼」の付合関係が記載されるように、旅と虱は縁が深く、四月一日の更衣を前に、虱が付いた冬の布子を着ているのだと解される。また、前句から旅人を導き出す過程では、「天気↓旅」「日和↓旅人」(『類船集』)の連想も働いているであろうし、虱を出したことについては、「二句の余情には暖気十分なるべし」(『通旨』)という見解が参考になる。諸注が指摘する通り、初折の早々に「虱かき行」さまを描いた点は興味深く、俳諧性が十分な一句と言える。

はきも習はぬ太刀の鞘

翁

初オ4 雑

〔句意〕身に付け慣れない太刀に褙肌革の鞘袋を着せている。
〔付合〕①前句を旅に慣れない人のさまと見て、一句がかもし出すおかしみにも着目し、②その人の風体にはどこも不自然・不調和な点があると考え、③褙肌の袋を付けた太刀が身にそぐわないとした。

〔備考〕前句の人物の持ち物を取り上げた会釈の付け。「はき」は「佩き」で、身に付けること。とくに刀剣などを腰に帯びること。ここでの「習はぬ」は慣れていないの意。「太刀」は腰に吊り下げる長大な刀。「鞘」は「意を以て造つた国字」(『連句抄』)らしく、普通は「褙肌」と書き、褙肌革(ヒキガエルの背のような皺を付けた革)で作った刀の鞘袋をさす。町人の旅でもこれが用いられたことについては、いくつかの用例が指摘され、この句の太刀を「武士でない身分の者の差す道中差をこの語でいつた」(『連句抄』)とし、「刀を差し馴れないので何となく窮屈さうに歩いていくさまがまことに可笑しい」(同)とする見方もある。一方、太刀の本来の意味を重視すれば、「都を離れて遠い任国へ赴く官人の道中」(浪本『鑑賞』)、「戦国時代、下賤の者の武功を立てて故郷に帰る姿か」(『新大系』)、「旅は公事か受領か、それとも戦乱か、いずれにしても…公家育ち」(安東『余韻』)などの解が生まれることになる。ここでは、「虱かき行」がもたらすおかしみとの釣り合いを重視し、『連句抄』の見解に従う。

月待て仮の内裏の司召

珍碩

初オ5 秋八月(月・司召) 月の句

〔句意〕月の出を待つようにして、仮の内裏で官吏の任命式が行なわれる。
〔付合〕①前句を慣れない太刀を身に付けた官人のさまと見換え、②それを急の登用で俄拵えした者の参上する場合と想定し、③月夜に仮の御所で司召があるとした。

〔備考〕「仮の内裏」は仮にしつらえた皇居のことで、火事や戦乱などによる非常時のそれであると同時に、天皇の行幸の際に設ける行宮の類をもさす。「司召」は「司召の除目」を略した言い方で、大臣を除く在京諸官庁の官吏を任命するための儀式。平安時代中期からは秋に行なわれ、『増山井』に八

月十一日とされる。ただし、応仁の乱の後には廃絶。『附合考』に『平家物語』の須磨や『太平記』の吉野を念頭に置いた付けであろうとの指摘があり、そうした仮の御所であつたたくし任官式が執行される場を想像したものと思われる。『婆心録』は「待て」をマタテと読むべきとし、これを支持する伊藤『全解』は「この二句の付合は、非常事態のあつたさげが目なのだから、「月待ちて」では悠長で、気分がそぐわない」とする。しかし、そもそも司召は夜に行なうのが通例なのだから、名月の時期を待つての意ではなく、月の出るのを待つての意にとれば問題なからう。

初才6 秋八月(初臼)

曲水

〔句意〕 初を摺るための臼をさつと作る、杣人の早業であることだ。

〔付合〕 ①前句を山中の仮御所で行なわれる司召と見定め、②その非常事態に大量の食糧が必要になったと考え、③木樵が手早く初臼を作るとした。

〔備考〕 「初臼」は初を摺って皮を除去するために用いる臼。「初する」は「毛吹草」等に八月の扱ひ。「杣」は材木を切り出す山やその木をさす語ながら、ここは「杣人」のことで、木を切り出して運ぶ木樵の意。

鞍置る三歳駒に秋の来て

翁

初ウ1 三秋(秋)

〔句意〕 鞍を置いた三歳駒にも秋がやって来て、いよいよ勢いづいている。

〔付合〕 ①前句を稲の出来がよいための措置と見て、②収穫期に活気づく山村のさまを想定し、運搬用の馬へと連想を進め、③鞍を付けた三歳駒も元気がよい秋であるとした。

〔備考〕 「三歳駒」は生後三年の馬。「鞍置る」により、その一人前になった

ことを表象する。「天高く馬肥ゆる秋」の成句もあるように、秋は馬にとつて元気づく季節であり、「三歳駒に秋の来て」は、その点を考慮に入れた措辞に相違ない。

初ウ2 雑

珍碩

〔句意〕 雨の名称もさまざまであり、降り方もさまざまに変わる雨である。

〔付合〕 ①前句を馬がよく育つたことに対する感慨と見込み、②そうした時間推移に思いを寄せると同時に、よくある場面として、馬に雨が降りかかるさまをも想像し、③雨はさまざまに名や降り方を変えるものであるとした。

〔備考〕 『全集』が指摘するように、「降替る雨」は、雨の名がさまざまに変わることで、雨の降り方も変化することの、両意を掛けたものである。

初ウ3 雑

曲水

〔句意〕 いろいろな人が湯に入っている、諏訪温泉の夕間暮である。

〔付合〕 ①前句から雨を見ながら思いにふけるさまを看取し、②空定めない地域を思い描きつつ、さまざまに雨に依じて、さまざまの人が集まる場を想定し、③夕暮れ時の諏訪の温泉は雑多な人でにぎわっているとした。

〔備考〕 「入込」は雑多なものが区別なく入り混じること、ここは混浴をさす。「諏訪」は現在の長野県諏訪市。「涌湯」は「湧湯」に同じく、湧出した湯と湧いて出る湯の両意があり、ここは後者で温泉の意。イデユと読むことにする。場を「諏訪の涌湯」と特定したことに關して、安東『余韻』は「東海道・中山道を通して宿場がそのまま湯の町になっているところは下諏訪かな」いことを指摘。「夕ま暮」は「夕間暮」で夕暮れ時の意。

中にもせいの高き山伏やまふし

翁

初ウ4 雑

〔句意〕中にも一人、背の高い山伏が目立っている。

〔付合〕①前句で雑多な人々が一つの湯につかっているという点に着目し、②その中でもとくに目立つ人物を描こうと考え、諏訪からの連想で霊場戸隠の行者に思い当たり、③湯の中には長身の山伏が混じっているとした。

〔備考〕「山伏」は山野で修行する修験道の行者。『附合考』が「戸隠禪定にや」と指摘するように、信濃国の戸隠山は修験道の霊場として知られ、「諏訪」からその連想を介して「山伏」を導いたのであろう。『三冊子』に「前句にはまりて付たる句也。其中の事を目に立ていひたる句也」とあるのは、付合のありようをよくとらえている。

いふ事を唯一方え落しけり

珍碩

初ウ5 雑

〔句意〕議論の流れをただ一方へと導き、落着させた。

〔付合〕①前句を山伏が大勢いる中の長身な山伏と見換え、②山伏仲間の評議する場を想定しつつ、体格の大きさは性格にも現れるものと考え、③自説を押し通して言論を一つの方向へ決着させたとした。

〔備考〕「え」は「へ」の仮名遣い。ここでの「一方え落し」は、議論をある方向へ無理に誘引して落着させること。自説を通すことに強引なのである。

ほそき筋より恋つのりつゝ

曲水

初ウ6 雑 恋(恋つのり)

〔句意〕わずかな縁から恋心を抱き、その思いがつのつてしかたがない。

〔付合〕①前句を自分の思いを語ってやまない人のさまと見て、②恋に夢中でそのことばかり考えている人を想定し、③少しのきっかけで起こった恋情が高まっていくとした。

〔備考〕「ほそき筋より」は少しのことからの意。「つゝ」について、『新大系』は「当時の歌論に「程ふるつゝ」といい、「ける」に通う」とする。

物おもふ身にも喰へとせつかれて

翁

初ウ7 雑 恋(物おもふ身)

〔句意〕物思いに沈むわが身に、何か物を食べなさいと周囲から迫られて。

〔付合〕①前句からひそかに恋情をつのらせている女性の姿を看取し、②恋の病とは知らず、回りの者がそのやつれた姿に心配する場面を想像し、③恋に悩む身とも言えぬまま、人から何か食べるように強いられるとした。

〔備考〕「物おもふ」はあれこれ思いにふけることで、とくに恋の思い悩みをさすことが多い。「せつかれて」はしつこく催促されての意。「恋↓いはぬなげき・やつるゝ姿・人しれぬ思ひ」(『類船集』)などの常識的な連想を利用した付合である。

月見る顔の袖おもき露

珍碩

初ウ8 秋八月ないし三秋(月・露) 月の句

〔句意〕月を見るその顔は憂いに満ち、袖は涙の露で重くなっている。

〔付合〕①前句が恋にやつれたわが身のつらさを述べていた点に着目し、②その人の姿を他の視点から描こうと考え、③月を見るにも憂え顔、袖は涙に重たげであるとした。

〔備考〕この場合の「の」は「こゝで休止を置く間投的な措辞」(『連句抄』)。「袖おもき露」は「歌語」(『新編全集』)で、「露」は涙を含蓄する。『十寸鏡』

に「かぐや姫の月むかひに向けて終夜泪ぐみ、或は泣玉なみひしなど、此句のおもむき也」
との指摘があり、『竹取物語』を踏まえた可能性は否定できない。前句と合
わせれば恋の情が通うものの、一句としては恋から離れている。

秋風の船をこはがる波の音

曲水

初ウ9 秋七月ないし三秋(秋風)

〔句意〕秋風に吹かれて揺れ、波の音も高く、船の旅に恐れをなしている。

〔付合〕①前句から憂いを抱えた女性の姿を看取し、②都落ちなどの船に同
行する上臆のさまを思い描き、③秋風に波音も高い船の旅をこわがるとした。

〔備考〕「秋風」は『せわ焼草』等に七月の扱いながら、兼三秋のものとし
て使われる。「秋風の」の「の」も「間投的な休止の語法」(『連句抄』)か。『婆
心録』は月見の船とし、『新大系』も「袖おもき露」を波しぶぎに取り成し、
月見船を趣向した」と解する。一方、『秘注』を受ける浪本『鑑賞』は「平
家一門の西国落ちに随行して、船中の浮き寝の旅をつづけた上臆」の姿とと
らえ、伊藤『全解』は「ともあれ、ある物語中の一場面を想像した」ものと
説く。前句の悲愁感を重視して、ここでは後者に近い見方をした。

雁ゆくかたや白子若松

翁

初ウ10 秋九月(雁)

〔句意〕雁の飛んでいく方向、あれが白子・若松のあたりであろう。

〔付合〕①前句で客が船旅を恐れていることに着目し、②難所もある伊勢湾
の航行を想定して、③客が雁の行方を追いつつ、あのあたりが白子・若松か
と思いやるさまにした。

〔備考〕「雁」は『はなむ草』等に九月の扱い。「白子」と「若松」はともに
現在の三重県鈴鹿市内の地名で、伊勢参宮道にある当時繁盛の港町。白子の

北に若松がある。伊藤『全解』に「難所遠州灘あたりを東へ向ふ客船の人々
などであらう」とある。

千部読花の盛の一身田

珍碩

初ウ11 春三月(花) 花の句

〔句意〕花の盛りの一身田では、千部経の読誦が行なわれている。

〔付合〕①前句で雁の行く先には白子・若松があることに着目し、②その視
点人物はそれより南方にいますと見え、「雁ゆく」を帰雁のことと見なして春
の光景を想像し、③花も満開の一身田では千部会えの真つ最中であるとした。

〔備考〕「千部」は「千部会」のこと。追善や祈願などのために同じ経を多
くの僧で読誦する法会で、諸注、ここは浄土三部経(無量寿経・観無量寿経・
阿弥陀経)を一部として、春三月に僧百人が十日間の読誦をするものである
とする。「一身田」は伊勢の地名で、現在の三重県津市の一地区。白子より
南方約一里に当たる。ここには浄土宗高田派の本山である専修寺があり、こ
の句の「千部読」は同寺での法会をさすと見られる。「雁を帰雁に見かえて
の季移りは常套」(『新大系』)のことで、秋の前句を受けた花の定座の要請
によく応じている。安東『余韻』は「白子は一身田より北。若松は白子より
もさらに北に当る、∴雁は北に帰る」と二句の関係を説明する。

巡礼死ぬる道のかげろふ

曲水

初ウ12 春二月(かげろふ)

〔句意〕巡礼の者が死んだ道には陽炎が立っている。

〔付合〕①前句が盛大な法会であることに目を付け、②多くの参列者がある
と考え、これに向かう一人の巡礼者を想定し、③その巡礼が死んだ道に陽炎
が立つとした。

〔備考〕「巡礼」は「順礼」とも書き、諸方の神社・仏閣や聖地・霊場を参詣して回ること、また、その巡拝をしている人。「かげろふ」は春の日の空中に光線のちらめくさまで、はかないものたえとされる。『産衣』には「雑なり。もゆるとすれば春なり」とあり、『毛吹草』『増山井』等に「かげろふもゆる」として二月の扱い。しかし、「かげろふ（陽炎）」だけで季詞とした実例は芭蕉にもあり、『糸屑』は「陽炎」を二月とする。『通旨』に「釈に無常をつけたり」とある通り、釈教句に無常の句を付けたもの。

何よりも蝶の現ぞあはれなる

翁

名才1 春二月（蝶）

〔句意〕何よりも蝶の現実に飛んでいる姿こそが哀れ深いものである。

〔付合〕①前句が無常の句である点に着目し、②そのはかなく哀れげな気分に見合う景物は何かと探り、③夢ならぬ現の蝶ほど哀れなものはないとした。〔備考〕「現」は「夢」に対する語で、現実の意。「蝶」といえば『莊子』『胡蝶ノ夢』の寓言が有名で、露伴『評釈』が指摘する通り、それを「蝶の現」と翻した点が一句の眼目であろう。陽炎が揺れるさまと蝶が舞う姿には、はかなげな気分で通じるものがある。

文書ほどの力さへなき

珍碩

名才2 雑 恋（文）

〔句意〕手紙を書くほどの力も出ないでいる。

〔付合〕①前句を蝶を見ながら嘆息するさまと見込み、②その人は恋にやつれて物憂い状態にあると考え、③手紙を書くだけの気力さえ出ないとした。〔備考〕ここでの「文」は手紙の意で、恋の詞として扱われる。

羅に日をいとほるゝ御かたち

曲水

名才3 雑 恋（句意）

〔句意〕薄衣をかざして日射しをお厭いになるお姿の麗しいことよ。

〔付合〕①前句を恋のために力を失っている人と見定め、②その人が慕うのは高貴で美しい女性であろうと考え、③薄衣で日光を避けていられるお姿であるとした。

〔備考〕「羅」は『書言字考節用集』にウスモノの読み。羅・紗などの薄い絹織物であり、それで作った夏用の衣服や頭にかざす被衣をさす。ここは被衣と見るのが適当であろう。近世の俳諧歳時記類では享保期の『通俗志』が初見で、五月の扱い。諸注がこの句を夏とする中、安東『余韻』は「雑と見るべき」とし、この後に雑が続いてまた名才9で夏（「蚤」による）の曲水句になることもその理由として挙げる。これ以前に夏季として使用した例が見つけられないため、ここでも雑の句としておく。「いとほるゝ」は避けていらつしやるの意。「かたち」は容姿・容貌で、ここは美麗であることを含意していよう。前句の人物の描写ではなく、前句の人物が恋する対象を出した向付と見ておきたい。句中に恋の詞は見られないものの、一句全体に恋の情があるとしてよいだろう。

熊野みたきと泣給ひけり

翁

名才4 雑

〔句意〕熊野の地を見てみたいとお泣きになった。

〔付合〕①前句をめつたに外出もしない都の上臈と見込み、②その人にはかなわない遠出の願いがあると想定し、維盛が入水してその北の方が出家した話を思い起こし、③熊野を見たいものだと泣き伏してしまったとした。

〔備考〕「熊野」は紀伊半島の南部一帯で、現在の和歌山県・三重県にまた

がる。熊野三社などがあり、信仰の対象として名高い。いかにも何か故事・物語類を踏まえたらしい付け方であり、さまざまな候補が挙げられる中、「熊野↓維盛入道参詣ノ心」（『類船集』）の関係に着目した見解が有力視されている。すなわち、『平家物語』巻十における維盛の熊野参詣とその後の入水、これを知って嘆き慕う北の方を佛としたとする見方（古注では『瓢註・猿蓑註』が指摘）であり、作者の念頭にこれがあつた可能性は大きい。実際には行けないから泣くのであり、前句を旅姿と見るには及ばないであろう。

手束弓紀の関守が頑に

珍碩

名才5 雑

〔句意〕手束弓を持った紀州の関守が頑固に立ちふさがる。

〔付合〕①前句を実際に熊野へ向かう者の泣くさまと見換え、②行く手を遮られて困惑している場面を探り、③弓を手にした紀の関守が頑として通行を許さないとした。

〔備考〕「手束弓」は手に握り持つ弓。「紀の関」は紀伊国（現在の和歌山県）と和泉国（現在の大阪府）の境にあつた雄山の関という。「関守」は関所を守る番人。「紀の関守」は歌語であり、引き留める存在として多く用いられる。「頑に」は頑固であること。諸注に指摘される通り、謡曲「誓願寺」に「我此の度三熊野にまゐり、…紀の関守が手束弓」とあり、これを踏まえたて見て間違いないだろう。安東『余韻』は長嘯子「雪の内に押しも春のたつか弓紀の関守や今日を知るらん」（『挙白集』）を知つての作かとし、その可能性もありうる。

酒ではげたるあたま成覧

曲水

名才6 雑

〔句意〕酒を飲み過ぎて禿げてしまった頭なのであるう。

〔付合〕①前句の関守を老いた頑固者と見込み、②その人の頭がてかてか光っているさまを想像し、③あの頭は酒のために禿げたものだろうとした。

〔備考〕「成覧」は断定の助動詞「なり」の連体形と推量の助動詞「らむ（らん）」の終止形に宛字したもの。酒灼けた人などが想像される。

双六の目をのぞくまで暮かゝり 翁

名才7 雑

〔句意〕双六の賽の目を覗き込まねばならないほど暮れかかってきた。

〔付合〕①前句の人物が酒を好む点に着目し、②その人を遊侠の徒と想定し、博奕に熱中するさまを思い描き、③日暮れ時に双六の目を覗き込むとした。

〔備考〕「双六」は賽（サイコロ）の目の数だけ盤上の馬（黒白の石）を動かす遊戯で、賭博に用いられた。「目」はその賽の目。

仮の持仏にむかふ念仏

珍碩

名才8 雑

〔句意〕仮の持仏棚に向かつて念仏に専念する。

〔付合〕①前句を旅の双六打ちの所作と見込み、②これと対照的な人物が同じ宿屋に泊っていると想定し、③仮の持仏に向かつて念仏三昧であるとした。

〔備考〕「持仏」は常に身近に置いて信仰している仏像。ここは「仮の持仏」とあることから、「仮の持仏堂」を略した言い方で、持ち運びできる持仏棚（仏壇）をさしたものと見られる。あるいは、旅中に持ち歩くため紙などで作った仮の仏像であるかもしれない。これに向かつて念仏を唱える主体については、「前句の遊び人の趣に對し、信心深い人を付けた」（『全集』）と見るのが妥当であろう。『全集』等が指摘する通り、同じ珍碩の初才5にも「仮の内裏」

とあったことは、気になる点である。

中く／＼に土間に居れば蚤もなし

曲水

名才9 夏五・六月ないし三秋(蚤)

〔句意〕かえつて土間にすわつていれば蚤もおらずに過ぎしやすい。

〔付合〕①前句を正式な仏間もない粗末な家と見て、②庵での生活に安んじる人物を想定し、③かえつて土間にいる方が蚤もなくてよい、との独言をもつて一句とした。

〔備考〕「中く／＼」はかえつての意で、畳の上にいるよりも意を含む。「土間」は家の中で床を張らず土のままにしてある所。「貧家に一夜を借りた」(『新大系』)場合と見ることも可能ながら、一句に「知足の心」(太田『解説』)が感じられることから、「家も放下して、あらたに素貧な庵住ひをはじめた」(同)ものと見ておきたい。「蚤」は『せわ焼草』等に五月、『毛吹草』等に六月、『通俗志』等に兼三秋の扱い。

我名は里のなぶりもの也

翁

名才10 雑

〔句意〕私の名は、この里の愚か者として知られているのだ。

〔付合〕①前句から世俗に対して超然とした人物像を感得し、②回りから変人扱いされても平気でいると考え、③わが名はこの里のなぶり者だ、との独言をもつて一句とした。

〔備考〕「なぶりもの」は愚弄・嘲笑の対象とされる者。自分に対する世間の評価をよく知りながら平然としているのであり、そこに一種の「清質」(『おくのほそ道』)が認められよう。

憎れていらぬ躍の肝を煎

珍碩

名才11 秋七月(躍)

〔句意〕迷惑がられながら、しないでもよい盆踊りの世話役を買って出る。

〔付合〕①前句の人物が里のなぶり者と自覚している点に着目し、②しなくてもよいとは知りつつおせっかいを焼き、それで皆に疎んぜられていると考え、③必要がないのに踊りの世話をはいやがられているとした。

〔備考〕「憎れて」は、ここでは面倒がられてといった程度の意。「いらぬ」は不要の意で、「ここでは、おせっかいな、でしゃばったの意」(『全集』)を含んでいよう。「躍」はいわゆる盆踊りの類であり、諸書に七月の扱い。「肝を煎」は世話をし取り持つの意。

月夜く／＼に明渡る月

曲水

名才12 三秋(月) 月の句

〔句意〕月夜に月夜を重ねて、明け渡る空に月が残るころとなった。

〔付合〕①前句から踊りの開催に熱心なさまを見て取り、②何夜も何夜も踊りが続くものと考え、その背景の夜空に想像を及ぼし、③月夜を重ねて有明月になったとした。

〔備考〕「明渡る月」は夜がすっかり明けても残る有明月。『日次紀事』「七月十四日」の項に「洛の内外、今夜より二十四日あるいは晦日に至るまで、少年男女踊躍をなす」とあるように、盆踊りは連夜に実施されるため、月のありようも変わっていくことになる。

花薄あまりまねけばうら枯て

翁

名ウ1 秋九月(花薄：枯て)

〔句意〕花薄もあまり招き続けたので、ついに穂先が枯れてきて。

〔付合〕①前句から時が過ぎて秋が深まる気配を看取し、②月に照らされた晩秋の野の光景を想像し、③なびき続けた薄の穂も枯れてくるとした。

〔備考〕「花薄」は穂の出た薄のことで、『増山井』等に八月、『はなひ草』等に三秋の扱い。『毛吹草』等では「薄散る」が九月とされ、「枯尾花」を並記するものもある。ここも「枯れる薄」で九月としてよからう。薄の穂が揺れるのを「人を招く」と見立てるのは和歌以来の常套(『類船集』に「招↓薄」)。「うら枯て」は草木の先端が枯れること。

唯^{ただ}四方^{よほう}なる草庵の露

珍碩

名ウ2 三秋(露)

〔句意〕ただ四角なだけの草庵にも露がしとどである。

〔付合〕①前句を晩秋の淋しい野の光景と見定め、②そこに住む人がいれば隠棲者に違いないと考え、③露けき中にただ四角い草庵があるとした。

〔備考〕「四方」は四角・方形の意で、『邦訳日葡辞書』(岩波書店)にヨハウの読みがある。『附合考』が「鴨の長明が方丈なども思ひ出られはべる」と述べるように、『方丈記』の草庵などが自ずと想像される。「露」は『毛吹草』『増山井』等に七月、『はなひ草』等に三秋の扱い。諸注、うら枯れた野に簡素な草庵を点じたものと見る中、『新大系』は「薄↓小町が幽霊」(『類船集』)の連想関係に着目し、「前句の擬人法から暗に晩年の小町を想定したもの」との新たな見解を示す。なお、同書が指摘する通り、同じ珍碩の初ウ5に「唯一方え」とあり、同字の重なりは気にかかる。

一貫の銭むつかしと返しけり

曲水

名ウ3 雑

〔句意〕一貫文の銭も面倒であると突き返してしまった。

〔付合〕①前句を何も無い簡素な庵と見込み、②これに住む人は名利にとられず清廉であると想定し、③銭一貫の恵みも厄介に感じて返したとした。

〔備考〕「一貫」は銭一千文のこと。金貨に換算すればおよそ一歩(一両の四分の一)に相当する。「むつかし」は気に入らず不愉快であるの意。「一貫文の無心にきた使を断り言うて帰す」(浪本『鑑賞』)のではなく、「銭一貫の施しも煩わしいと返してしまった」(『新大系』)ものに相違ない。直接的なつながりではないものの、「露」は豆板銀の異称でもあり、「露」と「銭」との間には一種の連想関係がある。なお、古注以来、兼好と頓阿が無心に関わる和歌の贈答をした故事(『続草庵集』)を踏まえるとの指摘が多いものの、これが一句の発想に大きく関わるわけではなからう。

医者^のくすりは飲^{のま}ぬ分^{ぶん}別^{べつ}

翁

名ウ4 雑

〔句意〕医者^のの薬は飲^{のま}まないという考えを固めている。

〔付合〕①前句をどんな金銭の恵与も受けない人と見定め、②その人は何に對しても潔癖で頑固な性情を見せると考え、③医者^のの薬など飲まずに死ぬつもりであるとした。

〔備考〕「分別」は物事をわきまえていること、思量・了見。ここでの「医者^ののくすりは飲^{のま}ぬ」は、医者^のの手にかかることはしないと意味であり、天命に任せ、いたずらに寿命を延ばすことなどは考えないわけである。二句の関係としては、「見舞金を固辞する其人の信条を付けた」(『新大系』)と見てもよいであろう。

花咲^{よしの}けば芳野^のあたりを欠廻^{かけまはり}

曲水

名ウ5 春三月(花) 花の句

〔句意〕花が咲いたとなれば吉野あたりを駆け回っている。

〔付合〕①前句を健康に自信があるゆえの了見と見換え、②健脚で遠出も厭わない人であろうと想像し、③花時分には吉野辺までも駆け回るとした。

〔備考〕「芳野」は「吉野」に同じく、現在の奈良県吉野郡吉野町を中心とする一帯の地名で、花の名所として著名。「欠廻」は「駆廻」に同じく、「欠」は通行の宛字。カケメグリと読むことも可能ながら、「聊か滑稽感のある「カケマハリ」の方が良い。風狂人の体が其処に浮んで来る」（『連句抄』）との見解に従っておく。

蛇あぶにさゝるゝ春の山中やまなか

珍碩

挙句 春二月ないし三春（蛇・春）

〔句意〕春の山中で、蛇に刺されてしまった。

〔付合〕①前句を吉野にまで花を見に出かけた人と見定め、②花に夢中で他事に注意が向かわないであろうと考え、③春の山中で蛇に刺されるとした。

〔備考〕「蛇」は双翅目アブ科の昆虫の総称で、雌には人畜から吸血するものがある。『はなひ草』等に二月の扱いで、『滑稽雑談』に「二・三月より生じて、夏月に存す」とある。

この歌仙全体に関するところえ方としては、「芭蕉の奥羽行脚後における一新風を示す重要な巻であることはいうまでもない」（『全集』）といったところが公約的なものと見ることができ、「この巻は、七部中でも有数の秀逸である。蕉風の匂付けがもはや全く完成の域に達したことを示してゐる」（伊藤『全解』）と高く評価されることも少なくない。一体、貞門・談林の初期俳諧では詞の縁に基づく親句しんくの付合が主流をなし、それが物付ものづ（詞付）の名で呼ばれたのに対し、芭蕉の切り拓いた蕉風俳諧では詞の縁に頼らない疎句そく

の付合が志向され、それが匂付においづけ（余情付）などと呼ばれてきたことは、周知の通りである。その「匂付」なるものが、前句に用いられた詞自体に付合の機縁を求めるとはならず、前句が発する気分なり雰囲気なりを重視して付けていくことであるとすれば、『ひさご』の「木のもとに」歌仙は、まさにその名称にふさわしい一巻と言える。

いくつか例示してみることしよう。まず、初才5・6の付合、

月待て仮の内裏の司召

珍碩

初白つくる袖がはやわぎ

曲水

の場合は、前句に「仮の内裏」とあることに着目し、急を要する常ならぬ事態にあることを見逃さず、これに応じる食糧の調達を趣向として立てたものであり、「はやわぎ」の一語がよく前句の緊急事態にかなうものとなっている。諸注に「はやわぎ」は前句の「仮の内裏」に応じたことばである」（『全集』）などと指摘される所であり、付句の作者はたしかに前句の「匂」をよく受けとめた付け方をしている。また、初ウ2・3の付合、

名はさまざまに降替る雨

珍碩

入込に諏訪の涌湯の夕ま暮

曲水

も同様で、諸注に「前句の「名はさまざまに」が、この句の「入込」に響いて：さまざまの人が一つ湯壺に漬つてゐる感じとなる」（伊藤『全解』）などと指摘される通り。作者は前句の「さまざまに」がもつニュアンスをいかすべく、付句の発想や表現に工夫を凝らしたと見て間違いない。これが曲水だけの傾向でないことは、名才12・名ウ1の付合、

月夜くゝに明渡る月

曲水

花薄あまりまねげばうら枯て

翁

などを見てもよく承知される。ここでの芭蕉（翁）は、「月夜くゝに」の夜を重ねた連続感をいかし、これを「あまりまねげば」のせわしなく揺れ続け

るさまに移したわけであり、この点も広く諸注に指摘されている。

一卷から同様の付け方を採すのに苦勞はいらず、むしろ、こうした「句」の付合はこの歌仙全体に満ちていると言つて誤らない。名ウ3・4の付合、

一貫の錢むつかしと返しけり

曲水

医者のかすりば飲ぬ分別

翁

の場合、「飲ぬ」という否定的な覚悟は、「返しけり」の断固として拒絶する気分を継承したものであろうし、名オ10・11の付合、

我名は里のなぶりもの也

翁

憎れていらぬ躍の肝を煎

珍碩

にしても、「憎れて」は明らかに「なぶりもの」の語意・語感を受けたものに相違ない。より顕著な例としては、名オ1・3の三句、

何よりも蝶の現ぞあはれなる

翁

文書ほどの力さへなき

珍碩

羅に日をいとほるゝ御かたち

曲水

を挙げることができる。「あはれなる」と「力さへなき」、「力さへなき」といはるゝには、意味の上でも大きく重なるものがあり、三句がもつ情調にはきわめて近いものが認められよう。しかも、芭蕉(翁)の句は、曲水の前句「巡礼死ぬる道のかげろふ」がもつ無常観をしかと受けとめ、これに「あはれなる」の語で応じたものであり、言い換えるならば、前句の「句」に応じる最適の一語を明示したことになる。同様の例としては、

木のもとに汁も鱈も桜かな

翁

西日のどかによき天気なり

珍碩

の発句・脇などもこれに該当しよう。珍碩は、前句の場面をよく見定め、その気分(句)にまで理解を及ぼした上で、それを「のどかに」の一語に表象させつつ、前句にふさわしい時分と天相を添えたわけである。

これらの付け方が、貞門・談林の物付からは隔絶したものであることに、異論の余地はない。また、各作者が、「前句は是これいかなる場、いかなる人と、其業・其位そのわざを能見定めよく」(『去来抄』)て趣向立てや句作に励んでいることも間違いない。その意味で、同歌仙を句付の一達成点を示す作品とすることに、躊躇の必要はないであろう。しかしながら、そのことは認めた上で、さらに言うならば、芭蕉晩年の連句作品との間に相応の違いが見られることもたしかである。紙幅の都合で挙例は控えるものの、『すみだはら』『続猿蓑』等に収められる芭蕉一座歌仙の場合、一見した範囲では、断片的な二句がただ並んでいるだけに見える付合が少なくない。それは、③「句作」の段階で思い切った飛躍と捨象を行なった結果にほかならず、別の言い方をすれば、疎句化の度合いがより進んでいるわけである。これと比較するならば、『ひさご』『木のもとに』歌仙の場合、前句から感じ取った「句」に応じる詞を明示して付けることが多く、仮にそれを言表化すれば、余情の可視化された付け方ともいうことになる。以後の芭蕉の付け方は、その余情さえ非可視化する方向に進んでいくのだけれど、だから『ひさご』は途中段階を示す過渡期的なものに過ぎない、ということにはならない。題材(とくに人物像)や場面の多様性といい、打てば響くような付け方の呼吸といい、本歌仙や『猿蓑』諸歌仙の成果は最大限の賞賛を受けるに値する。「句付」はここでたしかに完成の域に達したのであり、『すみだはら』や『続猿蓑』もこれなしに存在することはないと行ってよい。では、『ひさご』『猿蓑』と『すみだはら』『続猿蓑』の関係をどう見るか。それは今後の課題としたい。

〔付記〕本稿は、平成二十九年科学費を受けての研究(課題番号:16K02416)の成果の一部である。

佐藤 勝明(和洋女子大学 人文社会科学系 教授)

(平成二十九年十月十日受理)